

# 「歌仙傳」本文拾遺

——三十六人歌仙伝追考——

新藤 協三

要 旨 慶長十一年成立の後陽成天皇御作『百人一首抄』と、文政二年刊行の長野美波留著『百人一首抄』とは共に、『三十六人歌仙伝』から引用した歌人伝記が掲載される。そこで、それら二書所引の本文を詳細に検討してみると、現存伝本数の少ない異本系統本文であることが確認されるが、この事実をも踏まえて、近世期全般を通して、本書の主流本文は現在とは逆で、むしろ異本系統本文の方ではなかったのかとの見通しについても言及する。

三十六歌仙の伝記を集成した『三十六人歌仙伝』には、従来知られていた群書類従本に代表される流布本系本文の外に、それと対立する異本系本文も存在することが近年明らかになったが、<sup>(1)</sup>両系統の伝本数の多寡とは別に、『三十六人歌仙伝』の本文そのものの流布の跡付け、即ち、本書の本文を引用した文献を探り出すことは、これまでのところあまり容易ではなかったと言わざるを得ない。稿者が前稿までに知り得たのは、近世中期の延享四年（一七四七）に刊行された岨山春幸著『歌仙二葉抄』の一書のみであるが、<sup>(2)</sup>該書は「歌仙傳ニ曰ク」、「歌仙傳ニ」などと明確に『三十六人歌仙伝』を引用した旨を示しつつ、しかも、伊勢・素性・小大君の三歌人を除く三十三歌人についてきわめて多量に本文を引用、掲載するので、僅か一書ではあるが、該書の持つ意義は決して小さくなかったと言えよう。そして、そこに引用された本文を詳細に検討した結果、その本文は現存伝本数の少ない異本系のそれであることが判明し、近世中期には、現存の流布本伝本の数が示す如く、流布本系本文が通行していたのは当然であるが、それと並行して、異本系本文も伝存、流布していた事実を把握し得たのは貴重であった。

なお、この外、天保四年（一八三三）刊行の尾崎雅嘉著『百人一首一夕話』の中にも、『三十六人歌仙伝』異本に特有の記事を見出すが、『百人一首一夕話』が『三十六人歌仙伝』に依拠した旨の明徴は得られず、また、たとえ依拠したとしても、原典の漢文体詞章を和文脈に翻案した形で採り込むので、典拠資料として用いたと断定するには、なお躊躇されるものがあつた。

かようなこれまでの経緯を踏まえて、本稿では、その後に採り得た『三十六人歌仙伝』を引用する文献を詳細に検討し、それらの所引本文が流布本・異本いずれの系統の本文なのか見極めることを通して、当該時点での『三十六人

歌仙伝』の通行本文の実態を把握することを狙いとするが、論旨は前稿を引き継いでその追補の論述となるものである。副題を「――追考」とした所以である。

二

「百人一首抄」の書目で世上に流布する百人一首の注釈書は何種類も伝存するが、それらの一つに、後陽成天皇（二五七二～一六一七）御自作の『百人一首抄』があり、「後陽成天皇百人一首抄」、「百人一首御抄」、あるいは単に「御抄」とも呼称されて、同名異書の他の注釈書群と区別される。現在までのところ、宸筆からの直接の転写本と思われる宮内庁書陵部蔵（五〇一・四一四）本が孤本として伝わるのみである。注釈の形態・構成は『宗祇抄』以下の旧注に倣うもので格別目新しいものもないが、本書の特色は作者伝記が詳細である点に認められ、系図を掲出し諸説を列挙する等委曲を尽し、注釈の綿密なことでは、当時新作の『幽斎抄』と双壁を為すと言ってよい。

さて、この後陽成天皇御作『百人一首抄』（以下、適宜「後陽成抄」と略称する）は、作者の伝記を述べる際に諸説の典拠となる書名を掲げるが、注目すべきは、その中に僅か数例ながら「歌仙傳云」「歌仙傳にいはく」として『歌仙傳』の書名が見出されることである。具体的には敏行・素性・宗子・躬恒の四歌人の伝記に引用が見られるが、煩を厭わずそれらを列挙すれば次の如くである（私に句読点を施す）。

- (1) 哥仙傳ニ云 貞観八年正月任少内記、十二年二月任大内記、同十三正藏人、同十五正七従五位下、同月出羽介、八月中務少輔、同十六正大宰少貳、同十七正圖書頭、元慶二正因幡守、同三八月右兵衛権督佐、同六正七従五位上、仁和二六月左近衛少将、同四正兼備前権介十一月補藏人、寛平四正七正五位下、同五六月兼同介、同六二月權中將、四月兼春宮大進、同七三月轉權亮中將如元、十月藏人頭、十一月轉亮、同八正従四位下、四月依病辞頭、同九正兼

近江權守、七月十三日從四位上坊官、九月右兵衛督、延木七年卒。家傳云、昌泰四年卒。云々

(敏行)

(2) 哥仙傳云 寬平八年潤正月行幸雲林院之日、大納言源朝臣奉勅宣命由性大法師為權律師、弘延素性兩法師絕度者

給殿

一人、共起稽首舉声歡喜。昌泰元年宮瀧遊覽記、号曰良因朝臣、取任所之名石上等良因院、數日前駈間猷和哥、免暇帰寺

日、給御衣御馬、數盃之後、急茂恩賜著御衣騎御馬直向山者。延喜六年二月廿六日御記云、於龍芳舍書御屏風、同

九年十月二日御記云、出御前書御屏風、左近中将定方給酒猷哥、即給祿赤絹御衣御馬等也。

(素性)

(3) 譚仙傳云 正四位下行右京太夫源朝臣宗子式部卿本康親王一男仁明天皇御孫數私云不審、寬平六正七從四位下王氏、改姓為臣、八年正月任丹

波權守、同九十一廿三從四位上主考、延喜四二月任撰津權守、同五正兵部大甫、同八正右馬頭、同十年參川權守、

同十五六月相模守、延長三十月信濃權守、承平二八月伊勢權守、同三十月右京太夫、天慶二正七正四下、同年々月

卒。

(宗子)

(4) 譚仙傳にいはく 寬平六二廿八甲斐權少目、延喜七正十三丹波權大目御厨子所、同十一正十三和泉權掾。延長四

年大井河行幸和哥署所、注散位凡河内躬恒、伴日題九讀人六人每題各一首、但躬恒除鶴江立之外題猷二首、奥又副

一首也、依哥多不注出。後撰和哥集才十五卷云、任淡路掾秩滿オシシ歸都之由見右哥、云、引裁し人はむへこそ老にけれ

松も木たかくなりけるかな、其詞云、淡路掾任滿上之時兼輔卿之粟田山庄にて讀一本云。

(躬恒)

一瞥してわかるとおり、『三十六人歌仙伝』(以下、適宜「歌仙伝」と略称する)と表現上異なるのは、例えば「貞

観八年正月任少内記……同十三正藏人、同十五正七從五位下、同月出羽介」(敏行)の如く、紛れることのない範囲

内で「十三年、正月」「補藏人」「正月、七日、叙從五位下」「任、出羽介」等の「年・月・日・任・叙・補」などの文字は

省略する傾向にあることである。したがって、後陽成抄と歌仙伝との差異を考察するに際しては、如上の略表現は考

慮外として、実質的な内容上の相違点を検討してゆきたい。

ところで、同じく百人一首の注釈書群の一書として、後水尾天皇（一五九六～一六八〇。後陽成天皇の第三皇子）御作の『百人一首抄』が伝存する。本書は、書目を「百人一首抄」とするものの外「小倉山庄色紙和歌」と呼称される伝本もあり（以下、適宜「後水尾抄」と略称する）、管見し得たのは、（一）陽明文庫蔵（近・二三九・九二）『小倉山庄色紙和歌』、（二）陽明文庫蔵（近・二二九・九二）『小倉山庄色紙和歌』、（三）陽明文庫蔵（別置）『百人一首抄』、（四）高知県立図書館蔵（ヤ九一・二〇八）『小倉山庄色紙和歌』の四本である。この後水尾抄は、父帝御作の後陽成抄同様に、諸説を数多く掲げて引用する点に一つの特色があるが、着目すべきは、諸説を掲げる中に「御鈔」、「御鈔ニ」、「御鈔云」等として、後陽成抄をかなり大部に採り入れて引用することである。それ故、転写本一本のみが伝存するという後陽成抄の本文状況の乏しさを、引用本文ではあるものの相当広範に補い得て有益である。

さて、そこで、前掲後陽成抄所引の四歌人の伝記について後水尾抄の当該本文を検討するに、宗子・躬恒の二人はそのまま後陽成抄の本文を転載するのに対して、他の敏行・素性の二人については、「御鈔云」としながらも「歌仙傳云」なる引用は見られない。このうち敏行については、

御鈔云夢中詣冥途墮地獄人又死去於冥途逢焰聽裁判蘇生書一切經人也愚私此次哥仙傳長々被載之畧之

と記すように、「御鈔云」以下の、後陽成抄にも見られる「夢中詣冥途……書一切經人也」の文言に続けて、後陽成抄所引歌仙伝の記述が長い故、それを省略する旨を断っている。なお、文中の「愚私」は謙辞で、後水尾院の私的見解を指す。一方、素性に関しては、

御鈔云又俗名保時ト云、各非也

とのみ掲げる中に「歌仙傳云」の語句は見受けられぬが、これはおそらく、後水尾抄が歌仙伝を官位昇進の次第を知る文献とのみ限定して扱ったためと考えられ、先掲後陽成抄の記載に一目瞭然の如く、官位昇進に関する記事なき故

に、転載するに及ばなかったものと思われる。

このように、後陽成抄を注出する後水尾抄の姿勢には私意の加わる面も見られるが、歌仙伝本文を引用された宗于・躬恒の二歌人について、煩を避ける意味で本文の掲出は省略して結論のみを言えば、両者に本質的な差異は認められないと見做し得るので、部分的ながら孤本の後陽成抄を補完する本文資料たり得るのである。その事実を踏まえた上で、以下、後陽成抄所引の歌仙伝の本文が流布本系、異本系いずれの本文なのか具体的に検討を加えるが、ここで章を改める。

### 三

先に掲げた後陽成抄所引の四歌人にかかわる歌仙伝本文のうち、先ず注目したいのは躬恒の条の本文である。何故なら、歌仙伝の躬恒条の本文は、流布本と異本の間に、異本は流布本にない特有記事を持ち、流布本と異本との違いを顕著に際立たせて、両者を区別する目安の一つとなる本文だからである。即ち、歌仙伝の流布本本文<sup>(3)</sup>（本文は群書類従本版本に拠り、私に句読点を付す。以下同じ）は、官職歴任のあらましと大井河行幸の折の詠作の話との二項から成る。

散位凡河内宿祢躬恒<sup>不見祖</sup> 寛平六年二月廿八日任甲斐少目、延喜七年正月十三日任丹波権目<sup>子御所</sup>、同十一年正月十三

日任和泉権掾。延喜四年大井行幸和歌署所、注散位凡河内躬恒。件日題九讀人六人毎題各一首、但躬恒毎題献二首、奥又副一首<sup>云</sup>。

これに対して、前引後陽成抄の記載は、この流布本歌仙伝の記事に続いて、「後撰和歌集第十五卷云」として、淡路掾秩満帰都の途次に兼輔の山荘で詠歌した話が加わって、記事量が増大しているが、異本歌仙伝の躬恒条を検する

に、流布本歌仙伝に対する後陽成抄所引歌仙伝の増益部分は、そっくりそのまま歌仙伝の異本特有部分に見出すのである。言い換えれば、躬恒の条に於いて後陽成抄の引く歌仙伝の本文は、異本系統のそれであったということである。異本歌仙伝の躬恒条の全文は掲出するまでもなからうが、後陽成抄との実質的異同は、「丹波権大目」が異本歌仙伝に「丹波権少目」と異文を示す一箇所のみであり、これは魯魚の誤とも見做し得るものであろう。なお、細かい点では、流布本歌仙伝に「大井行幸和歌……但躬恒每題献二首」とある所が後陽成抄所引本文には「大井河行幸和歌……但躬恒除鶴江立之外題献二首」と書かれ、「除鶴江立之外」の一文が加わるが（後陽成抄は「每題献二首」の「毎」の字を誤脱する）、これは異本歌仙伝にも見られる文言であつて、如上の想定を裏付ける一徴証たり得ることを言い添えておく。

躬恒条の一事を以てしても、後陽成抄の引く歌仙伝の本文が異文系本文であつたことはほぼ窺えるが、他の三歌人の本文については如何であろうか。次にはその点について考察を廻らすことにする。

後陽成抄が歌仙伝本文を引く敏行・素性・宗于の三歌人のうちでは、歌仙伝の流布本と異本との間に比較的目ぼしい違いの見られるのは宗于の条である。尤も、目ぼしい違いとは言つても、概ね異本の方が流布本よりも詳細な記述を見せる歌仙伝に於いて、この宗于の条では日時の記し方が部分的には流布本の方が細密なため、結果的に両者の間に差異が生じているのであり、異本にない内容を流布本が持つといった性格のものではない。流布本歌仙伝の宗于条は次のように書かれる。

正四位下行右京大夫源朝臣宗于<sup>光孝天皇孫式部卿忠親王男</sup>寛平六年正月七日叙従四位下<sup>王</sup>、改姓為臣、八年正月任丹波権守、九年十一月廿三日叙従四位上主基、延喜四年二月廿六日任摂津権守、五年正月十一日任兵部大輔、八年正月九日任右馬頭、十二年十月五日兼三河権守、十五年六月廿五日任相模守、延長三年十月廿六日任信濃権守、承平二年八月卅日<sup>サ</sup>

任伊勢權守、三年十月廿四日任右京大夫、天慶二季正月七日叙正四位下、同年卒。

前章で示した後陽成抄所引本文と対照すると、流布本歌仙伝は官位昇進の日時を、寛平八年正月の任丹波權守の一例を除いて、他は全て年・月・日まで記すのに対して、後陽成抄所引本文は、叙爵の場合のみ年・月・日まで記し、任官は年月だけにとどめる点で異なっている。しかして、異本歌仙伝を見ると、日時の記載法は後陽成抄所引本文と悉く一致するのである。加えて、歌人名表記の下に持つ割注も、後陽成抄本文が「式部卿本康親王一男。仁明天皇孫歟。私云不審」とするに対して、流布本歌仙伝は「光孝天皇孫。式部卿是忠親王男」と別伝を掲げて異なる所も、異本歌仙伝は、「私云不審」の語句は欠くものの「私云不審」は後陽成抄時点での付加文言であろう）、後陽成抄本文と一致するので、これらの事実より、宗于条に於いても、後陽成抄所引本文が異本歌仙伝の本文であることを確認し得る。なお、歌仙伝の本文自体にかかわることとして、流布本本文は、異本本文に基づいて概ねそれらを抄出、整理して成立したと考えられるにもかかわらず、宗于条では、流布本の日時の記載がむしろ詳しいことや、作者割注が別種の資料に拠るらしいことなどから、流布本本文の成立について新たな問題を提示するが、この点は本稿の主旨から逸脱するので、別稿を期したく思う。

以上のように躬恒・宗于の二人について後陽成抄所引歌仙伝の本文を検討した結果、後陽成抄は歌仙伝の異本系本文に依拠することが確認されるが、残る敏行・素性の二条については、そもそも歌仙伝の流布本と異本とにさしたる異同がなく、また、後陽成抄所引本文を加えた三本間で、相互にごく些細な違いを示すなど、所期の狙いとする、後陽成抄所引本文が流布本・異本のいずれに親しいのかという、その見極めに有効なる徴証は得られない。が、こうした事象が、後陽成抄の異本歌仙伝依拠に対して、積極的反証となり得ないのも確かであって、躬恒・宗于の二例から推して、異本歌仙伝依拠の蓋然性は高いと言えよう。なお、敏行に関して、流布本本文を群書類従本に拠る限りでは



異本との間に顕著な違いが見られぬが、類従本以外の流布本伝本全般を眺めわたした場合、次に示すような大きな脱文が指摘される。即ち、後陽成抄所引本文とも一致する異本歌仙伝の

仁和二年六月任左近衛少将、四年正月兼備前権介、十一月補藏人、寛平四年正月七日叙正五位下、五年六月兼同介、六年二月任權中將

とある箇所が、類従本以外の管見の流布本系伝本には悉く、

仁和二年六月任左近衛少将、四年正月兼・六年二月任權中將

とあるので、異本歌仙伝の傍線部分を脱することがわかる。脱文前後の「兼備前権介」と「兼同介」とが近似するため、祖本段階での目移り等による誤脱の考えられるところであり、また、この脱文のない類従本は、流布本系諸本内に於いて、その祖本がかなり早い時期に他から分派したことを窺わせる。ともあれ、この事象をも加味して考えられるのは、後陽成抄が、多くの伝本に脱文の見られる流布本系諸本の中の、たまたま脱文のない類従本系本文に依拠した可能性よりも、本来脱文のない異本系本文に依拠した可能性の方が高いことである。因みに、後陽成抄所引本文と異本歌仙伝とが、貞観十二年二月に大内記に任じ、元慶三年八月に右兵衛権佐に任じ、寛平九年正月に近江權守を兼任したとすることに対して、類従本歌仙伝は夫々、十二年正月、右兵衛佐、寛平九年三月の如くに小異を示すのであるが、この点も如上の推測に符合する事象と言えよう。

#### 四

後陽成抄が「歌仙傳云」として歌仙伝引用を明示するのは上記の敏行・素性・宗子・躬恒の四歌人のみであるが、この外、歌仙伝に依拠した旨を記さずに伝記を掲げる歌人もあり、それらについてはいくつか問題を残す点もある。

先ず、前記四人以外に、後陽成抄が伝記を掲載する三十六歌仙歌人を挙げれば、貫之・家持・友則・朝忠・敦忠・重之・興風・元輔・是則・能宣・忠見・兼盛の十二人である。それらのうち注意したいのは、例えば貫之については「傳云」、家持については「家持傳云」と書き出すことであって、貫之の「傳」が「歌仙傳」を指すものかどうか、また家持の場合、「家持、傳云」の意味なのか、あるいは「家持傳」なる典拠を指すのか、そのあたりのことが問題となるからである。しかして、貫之に関しては、歌仙伝の流布本と異本とに内容上の違いは殆ど見られず、また、後陽成抄所引本文も両者と対立する要素を持たぬので、歌仙伝依拠を明示しないまでも、この「傳云」の「傳」はおそらく歌仙伝の影響を受けた文獻、もしくはまさに歌仙伝そのものを指すのではないかと思われ、歌仙伝異本がば、前述の躬恒・宗于の二例から推して、異本系本文であつた可能性が高い。一方の家持については、歌仙伝異本が流布本にない記事を末尾に持つ点で違いがあり、かつ、後陽成抄所引本文が日時の記載等に於いて異本歌仙伝よりも詳細な点で異なり、更に、後陽成抄所引本文は、歌仙伝異本特有の末尾記事の後半部分を脱落させる形で、しかも内容の誤りを伴つたままで終止するなど、後陽成抄が異本歌仙伝を引用しているとは到底考えられない。異本歌仙伝と後陽成抄所引本文とのそれぞれの末尾部分を掲出、比較すると、先ず異本歌仙伝は

（延暦）四年八月薨。後廿餘日其骸未葬。大伴継人竹良等、射殺中納言藤原種継事發覺下獄。按驗之事連家持等。由是追除名其息永主等、並處流。

とあって、流布本歌仙伝の末尾「（延暦）四年八月薨」の次に「後廿餘日……並處流」の特有記事を持つが、この部分の後陽成抄所引本文は

同（延暦）四年八月薨。後廿餘日其骸未葬。大伴継人竹良等、射殺中納言大伴家持。

の如くで、後陽成抄がいかなる典拠を用いて家持の伝を得たのか、その点は目下のところ不明である。

家持の例に見るように、後陽成抄がいかなる資料を伝記の典拠としたのか不明な点では、朝忠・敦忠の条も同様である。両者とも歌仙伝の流布本・異本間にさしたる異同なく、家持の例と同様、任官日時の記載に於いて後陽成抄の方が詳細となるが、これらの伝の典拠が何であったか、やはり不明である。

家持・朝忠・敦忠三例の如く、後陽成抄の典拠を歌仙伝異本に求め得ぬ場合もあるが、典拠を明示せぬものの、やはり異本歌仙伝に拠ったかと思われる例も見出される。忠見・元輔・能宣・兼盛・重之ら後撰・拾遺初出歌人の経歴であれば、先述の躬恒ら四歌人に異本歌仙伝依拠が窺われるのであるから、歌仙伝に拠ったであろうことは想像に難くないが、事実、後陽成抄のこれらの歌人の伝は、鳥罵の誤と目すべき細部の異同を除いて、基本的には異本歌仙伝に一致すると見做してよい。しかも、それが流布本でなく異本であったことは、例えば重之の条で、従五位下に叙するのが安和元年十一月廿七日とする後陽成抄に比し、流布本歌仙伝は康保四年十一月廿七日と異なる箇所を異本歌仙伝に検すると、流布本は「十一月廿七日」の直前に「安和元年」の年紀を脱することがわかり、また、忠見の条で、後陽成抄が作者割注に「本忠實、有所思書見字也」の文言を持ち、天徳二年に摂津権大目に任じたとすに對して、歌仙伝流布本が夫々当該の割注を欠き、任官を摂津大目として異なりを見せる部分も、歌仙伝異本は後陽成抄に一致するなど、細かい点ではあるが、如上の想定に即応する事実のあることによって認められよう。

この外、友則・興風・是則の古今歌人三人の伝記については、共に記事が少量なので歌仙伝の流布本・異本の間に目立った異同もなく、また、後陽成抄との異同も殆ど見られないので、異本歌仙伝依拠の確たる徴証は得難いが、該書に拠った可能性を殊更否定する要素ともなり得ない。なお、是則の条には「傳云」の語句が冠されるが、先述の貫之と同じような推測が当てはまろう。

以上縷述を重ねたように、歌仙伝依拠を示さぬ伝記の中にも、異本歌仙伝に拠ったことを思わせる例が見られる

が、一方で歌仙伝依拠の旨を明示するのに、他方でそれを明示せぬのは何故なのか、その点は不明である。ただ、異本歌仙伝依拠の可能性濃厚な重之の条で、歌仙伝異本・流布本が共に末尾を「於陸奥国卒」とする所を、後陽成抄に「於奥州卒」とある事実などを勘案すると、歌仙伝に拠りながらも、なお内容を斟酌して記述を多少改めることがあったために、歌仙伝に拠った旨を明示しなかったことなども想像される。

後陽成抄に掲載される三十六歌仙歌人の伝記を網羅的に検討した結果、家持・朝忠・敦忠など、明らかに異本歌仙伝以外の典拠を想定すべき例もあるが、躬恒・宗子・素性・敏行の四例のように歌仙伝依拠を明示したもの、あるいは、歌仙伝依拠を謳わぬまでも、歌仙伝に拠ったことが想定されるものまでも含めると、後陽成抄が歌人伝記の典拠の一つに、異本歌仙伝を重視したという事実が浮かび上がるのである。後陽成抄の成立はその奥書「寡人以管窺聚諸抄書之／後世之嘲有耻<sup>云</sup>／慶長十一稔凛秋下澣／從神武百余代孫周仁」に示すように慶長十一年（一六〇六）、近世極初期である。この当時、百人一首歌人の伝記を知る典拠の一つとして、百人一首の注釈書でもない『三十六人歌仙伝』が用いられていた事実は、本書が歌人伝記を伝える書として、相応の評価と権威とを付与されて世上に流布していたことを語るものであり、しかも、その本文が現存伝本数の少ない異本系統の本文であったことで、現在の二系統本文の流布の状況とは逆の現象を知り得る点も興味深い。

## 五

近世後期の文政二年（一八一九）に刊行された長野美波留著『百人一首抄』は、書目のとおり百人一首の注釈書であるが、絵入りで刊行された版本は上段と下段とを頒ち、百人一首の注釈は下段に載せ、上段には「三十六人撰」の書目で、三十六歌仙の歌各一首宛計三十六首の注釈と、「若菜事」「子日事」などの年中行事の説明とそれに関する和歌

とを載せる、所謂合刻本である。本書の構成は歌人略伝と和歌の解釈とから成るが、歌人略伝には多く典拠とした書目が掲げられ、その中に「歌仙傳云」等の記載を見出すので、本書（以下、便宜上「美波留抄」と略称する）の引く『歌仙傳』が歌仙伝の流布本系統・異本系統のいずれの本文なのか、後陽成抄所引本文の場合と同様にその点を見極め、文政期通行の歌仙伝本文の実態を把握しようと思う。

美波留抄の伝本としては文政二年刊本の外に、管見したものでは、静岡県立中央図書館蔵（九二・一四—二〇）本の写本も伝存するが、静岡図書館本は版本からの写しと思われるので、以下の考察では版本本文に拠る。

版本は文政二年の序文の次に、三十六人撰（上段）、百人一首抄（下段）の解説を記すが、三十六人撰の解説の中に「傳はかれこれの書よりひろひいでゝ歌の注の末にあげおきつ」と記す。実際には、敏行・宗子・躬恒・友則・敦忠など百人一首歌人と重なる歌人の場合には、三十六人撰ではなく百人一首抄（以下、両書を各々「撰」「抄」と略称する）の方に伝記を載せることもあり、また、興風・兼盛・朝忠・重之のように「抄」の所で「傳ハ歌仙の歌のところに出す（あぐ・のす）」と断る場合もあるなど、「抄」「撰」いずれに伝記を掲載されるのか、歌人によって区々であるが、それは多分に「抄」「撰」相互の注釈量の多寡にかかわること、即ち、いずれに余白があるかということによると思われる。なお、この事実から、美波留抄は当初より「抄」「撰」二書を合刻して刊行する意図のあったことを知る。

さて、美波留抄が「歌仙傳云」として歌仙伝から伝記を引用するのは、躬恒・友則・兼輔・朝忠・敦忠・高光・公忠・斎宮女御・敏行・頼基・重之・宗子・信明・興風・元真・仲文・能宣・忠見・兼盛・中務の二〇歌人にのぼり三十六歌仙の過半数を占める。この外、間接的に歌仙伝を引用する小町のような例もある。小町については「抄」の部分に「拾芥抄云小町ハ出羽郡司女仁明承和ノ頃ノ人也（歌仙傳作者部類同之）」とあり、『拾芥抄』を引用する所に歌仙伝も同内容と

なる旨を割注で述べる。

小町の条に見られる間接的引用はこの一例に限られ、他の二〇歌人については歌仙伝を直接に引用する体裁をとるが、厳密に言えば、美波留抄所引本文は歌仙伝の全文ではなく、当該歌人の経歴の重要な部分のみを摘出する場合が殆どで、これまた歌の注釈に費したスペースに関連して、略伝掲載分にどの程度余白が残るかという点にかかわることのである。ただ、歌仙伝に多量に伝記が掲載される歌人の場合、許された余白内にその伝記のどの部分を採用入れるかという点になると、最終的には作者美波留の私意が働いたことも確かであろうと思われる。

## 六

右に述べたような事情があるため、歌仙伝の流布本・異本のいずれかにある内容が、美波留抄所引本文に見られぬ、というネガティブな観点は、この場合あまり有効とはいえない得ぬので、流布本にあるいは異本に特有の記載や記事内容を美波留抄所引本文も具有する、という積極的な視点を以て考察する必要がある。そこで、歌仙伝の流布本・異本間に比較的大きな差違のある歌人伝記を探り出して、美波留抄に当該部分の本文の掲載されるものを選ぶことにするが、この条件に適う事例として次の六例が挙げられる。

- (1) 歌仙傳云應和元年十二月四日到横川入道如覺 (高光)
- (2) 歌仙傳云天慶四年三月任近江守四月十二日昇殿六年二月兼右中弁八年依病辞弁九年卒年五十九 (公忠)
- (3) 歌仙傳云天慶二年十月七日任祭主十月任大輔云、天德二年卒 (頼基)
- (4) 歌仙傳云應和元年十月任陸奥守安和元年十二月五日叙従四位下治國天禄元年月日卒六十 (信明)
- (5) 歌仙傳云天禄三年十一月補祭主云、寛和二年十一月十八日叙正四位下大會、正暦三年八月九日卒七十延長元生云、(能宣)

(6) 歌仙傳云宇多天皇第四子二品中務卿敦慶親王女母伊勢云、又云朱雀院以後圓融院御宇間人也卒年不詳（中務）

最初の(1)高光の条は、流布本歌仙伝に「應和元年入道」とのみあって、「十二月四日到横川」の語句が欠けるが、この語句は異本歌仙伝には具有される。次の(2)公忠の条では、歌仙伝の流布本と異本とで没年及び享年が異なり、夫々「天曆二年六十」「天慶九年五十九」とするが、美波留抄所引本文は異本と一致する。(3)頼基の条では、流布本歌仙伝に祭主に任じた記事の部分が落ちていて見当たらず、「天慶二年十月七日任祭主」の一文は異本に特有の記事である。なお、美波留抄所引本文によれば、天慶二年十月に大輔（大副）の誤であろう）に任じたことになるが、異本歌仙伝で天慶八年とするので、所引本文には脱文であろう。(4)信明の条の末尾が流布本歌仙伝には「天祿元年卒」とあって「月日」の語が欠けるが、異本歌仙伝は「天祿元年月日卒」とする。なお、任陸奥守の日時も、歌仙伝異本が「応和元年十月」のみに対し、逆に流布本の方が「…十月十三日」と細かく記す点で異なる。(5)能宣の条は、歌仙伝の異本と流布本とに顕著な異同があり、流布本は祭主に補する記事そのものを欠き、また没年時の「八月九日」及び生年「延長元生」も保有しないので、美波留抄所引本文は異本歌仙伝本文の特徴を具備することがわかる。なお、所引本文が「天祿三年」とする所を、異本は前後の続きから「同三年」とする違いはあるが、これは美波留抄側の意改。最後の(6)中務の条に於いては、敦慶親王に冠する修飾詞「宇多天皇第四子二品」までを歌仙伝流布本は欠き、異本は具有する。また、文中の「朱雀院」「円融院」が流布本には夫々「朱雀天皇」「円融天皇」となり、異本と対立する。

以上に掲げた六例は全て、美波留抄所引本文が、歌仙伝本文二系統のうちの異本系本文の特徴を備えていることを示す。先述のように、美波留抄所引本文は当該歌人の歌仙伝本文の全文を掲出するのではなく、一部分を抄出する故に、前後の首尾照応を図る必要上歌仙伝本文を忠実に転載し得ぬ場合もあろうが、その点を斟酌しても美波留抄所

引本文が歌仙伝の異本系本文であることは十分認められると思うのである。因みに、歌仙伝を間接的に引用した小町の伝についても、文中の「出羽郡司女」の語句は歌仙伝流布本には見えぬ内容で、異本の「出羽国郡司女也」に相応するものである。

では、以上の六例以外の他の歌人の伝記については如何であろうか。次にはその点に言及する。美波留抄所引本文は歌仙伝の部分抄出のため、全般的に引用本文は短いものが多い。引用された本文に限定して見た場合に、歌仙伝流布本と異本とに異同が見られず、引用本文とも違いの認められぬ例、即ち、三者が全く一致する例や、あるいは三本間にいく些末な異同が相互に見られるものの、結局はほぼ等しいと見做し得る例は、友則・兼輔・敦忠・斎宮女御・敏行・元真・兼盛の七例ある。これらは、美波留抄所引本文が歌仙伝の流布本・異本のいずれに近いかとの判定の下し得ぬものであって、それ故、具体例掲出の意味を認めないので省略するが、美波留抄所引本文が異本歌仙伝系本文であることの可能性を否定するものではない。

次いで、美波留抄所引本文と歌仙伝両系統各本文との三本間に於いて、大きな異同はないがどちらかと言えば所引本文は異本に親しいと見られるのは、躬恒・朝忠・宗子・興風・仲文・忠見の六例を数える。例えば、忠見条の所引本文「歌仙傳云天徳二年正月三十日任撰津権大目」の語句が流布本歌仙伝には「撰津大目」と載り、異本と対立する類である。躬恒では所引本文と異本が「甲斐権少目」とするところを、流布本に「甲斐少目」とあり、同様に、朝忠では「依病辞督」↓「依病辞右衛門督」、宗子では「同（天慶四）年々々卒」↓「同年卒」、興風では「延喜四年正月廿五日」↓「正月十五日」、仲文では「正暦三年二月卒」↓「貞元三年二月卒」等、きわめて些細な違いであるが、美波留抄所引本文と異本歌仙伝とが一致し、流布本歌仙伝と対立する要素となる事例を拾い上げることができる。

以上に述べ来たった諸事象は、美波留抄の引く歌仙伝が異本系本文であることを肯定しこそすれ、積極的に否定す



る要素にはなるまいが、この外に一例、如上の想定の方証になりそうな事例がある。それは重之条の本文であるが、美波留抄所引本文は「歌仙傳云長保年中於陸奥國卒」とあつて流布本歌仙伝と全く一致するが、異本には「長保年中」が「長保年月」と書かれ、所引本文・流布本と対立する。したがって、この一事象のみを重視すれば、美波留抄所引本文は流布本系歌仙伝の本文ということになるが、この場合の差異は「月」↓「中」の僅か一文字であつて、きわめて生じ易い異同と思われるし、先述来の諸事例の示唆する方向を覆すほどの強固な反証とはなり得まい。美波留抄自体の改変と考えるか、もしくは、美波留抄の依拠した異本歌仙伝の段階で既に異同を生じていたと考えるか、そのいずれかであると思われる。

七

美波留抄に歌仙伝から伝記を引用される二〇歌人について、その引用本文を概観した結果、その本文は歌仙伝の異本系本文であることが判明した。美波留抄が伝記の典拠として掲げるのは、歌仙伝の外に『拾芥抄』『勅撰』作者部類』『（新撰）姓氏録』などがあるが、典拠書名を掲げず略伝を記述する場合もあり、例えば、「中納言兼輔卿男。天徳二年七月卒」（清正）、「深養父孫從五位下行下総守泰光一男。母ハ從五位下筑前守高向利生女」（元輔）などの類で、これらが、異本歌仙伝と矛盾しない内容であるにもかかわらず、典拠名を掲げぬのは、拾芥抄や作者部類とも共通するような周知の事実であつたため、殊更明示する必要を認めなかつたのであろうか。また、忠見の例の如く、「撰」に於ける歌仙伝引用の外、「抄」にも「拾芥抄云忠岑男童名ハ名多」と略伝が記されたり、あるいは、人麻呂・貫之等の著名歌人の場合のように、和歌の注釈に大部分が割かれ、僅かに姓氏録や作者部類から略伝を拾う如き体裁になるなど、伝記の掲げ方、典拠書目の選び方等まことに多様である。

かような状況の中で、三十六歌仙歌人に関しては、かなりの頻度を以て異本系統本文の『三十六人歌仙伝』が使用されている事実は、後陽成抄の場合と同様、本書が、文政期の時点に於いても、然るべき由緒ある典拠資料としての地位を占めていたことを示唆するのである。

後陽成抄と美波留抄、この二種類の『百人一首抄』所引の歌仙伝の本文が共に異本系本文であったこと、即ち、近世極初期と近世後期とに異本系歌仙伝が通行していた事実は、前稿で触れた『歌仙二葉抄』(延享四年＝一七四七年刊行)所引本文も異本系本文であったことを考え併せるとき、近世期全般に亘って『三十六人歌仙伝』の主流本文は、現在とはむしろ逆で異本系統本文ではなかったか、との想像も現実性を帯びてくる。かような想像を敷衍すれば、冒頭で触れた、『百人一首一夕話』が異本系歌仙伝を下敷きにしたとの可能性も、前稿までの段階よりも更に高まろう。

かくの如くに俯瞰してみると、今後は、流布本歌仙伝を引用した文献と邂逅することが課題の一つとして浮上して来る。本稿で見たとおり、「歌仙傳」の書目で示されたのは異本系本文であったが、前稿までの結論を一步進展させるべく、流布本は「三十六人歌仙伝」、異本は「歌仙伝」の名称で統一され、本来は原撰本と抄出本の本文関係にあるべき二系統の本文が、近世期に於いては、相互に近似する類書として、異なる二つの書目の如く見做されていたことなどにまで想到するのである。この点にかかわって一つ興味深い事実に逢着した。尊経閣文庫蔵(p・三五九)『歌仙傳』は、江戸中期ごろ書写の一冊本、蔵書目録には「歌仙傳」と載るが、『中古歌仙三十六人伝』との合綴本で、内容は流布本歌仙伝であって、その点では例外的事例となる。が、これは結論的には本書の方の誤り。注目すべきは表紙に書かれた外題で、左端に墨筆にて「三十六人歌仙傳 全」と打付け書きしたその左傍に、朱で見せ消チ符号を付して、改めて表紙中央に朱筆にて訂正書名を記すが、その書名は「歌仙傳或云三十六人歌仙傳」。

注

- (1) 拙稿「異本三十六人歌仙伝——翻刻ならびに解説——」(『国文学研究資料館紀要』第八号、昭和五十七年三月)
- (2) 拙稿「『歌仙二葉抄』と『歌仙傳』——三十六人歌仙伝統考——」(『国文学研究資料館紀要』第十二号、昭和六十一年三月)
- (3) 管見の諸本は、群書類従本(版本)の外、静嘉堂文庫蔵本・名古屋大学蔵本・東北大学蔵本・金城学院大学蔵本・島原松平文庫蔵本・彰考館蔵本・松野陽一氏蔵本・宮内庁書陵部蔵三本の計一〇写本、いずれも類従本に対して非類従本系統に属する。この外、尊経閣文庫蔵本二本の伝存を確認しているが未精査。
- (4) 拙稿「『三十六人歌仙伝』考——作者ならびに成立年時——」(『国語と国文学』昭和五十七年十月号)